

社報 御霊本宮

第83号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
8月1日

野球の神様

オリンピックが中盤を迎え、高校野

球夏の甲子園大会がまもなく始まる
うとしています。野球好きの私として
は、ペナントレースが中断されて寂し
く思っていました。待ジャパンの活
躍や、これからの高校野球に、またワ
クワクする時を迎えました。

さて、野球には神様がつきもので、
特に高校野球の甲子園では野球の神
様がいた！というようなコメントが
聞かれることがあります。本当に野球
の神様はいるのでしょうか。

私自身、小学生のときに野球をや
り、成人してからは少年野球の指導者
として野球に携わってきました。その
経験からいうと、野球の神様はいま
す。

「いる」と思う(思った)ときは、
その不思議な出来事が起こる予感が
あったり、起こった出来事が不可思議
であったりします。

相手の攻撃中に、次の回は〇〇君に
代打を送ろうと考えていました。その
〇〇君を強烈な打球が襲います。彼で
は捕れないと思った次の瞬間、彼は見
事にキャッチし追加点を阻みました。
攻撃は彼からの打順です。ファインプ
レーをしたからといっても、彼の打撃
は期待できません。しかし、なぜか交
代を告げる気になりません。というか
体が動かないのです。あれ？なに？と
か思っているうちに彼は打席に入り、
見事に3塁打を打ち、逆転勝利へと導
いてくれました。野球の神様が、「ち
よかちよか動くな。まあ見とけよ。」
と、私の体を抑え込んでいたのではし
うか。

こんな話を聞きました。「野球の神
様はすばしっこく、しかも全身がヌル
ヌルしていて捕まえることができな
い。しかし頭の一か所だけ毛が生えて
いて、そこは掴むことができる。行っ
たり来たり素早く動く神様の髪の毛
をうまく掴むことができた方が勝つ」
のだそうです。

この野球の神様を捕まえることが
できるように、練習に励んだり悪い癖
を直したり、野球以外のことで人間性
を高めるなど、指導者は選手の育成方
法を考えます。「努力は報われる」と
も聞きます。その通りだと思えます。
ただし、その努力は自己満足の努力で
はだめです。なんでもそうですが、自
分の物差しで測るのではなく、他人が
どう見ているかです。

故野村克也氏は言いました。「負け
に不思議の負け無し。勝ちに不思議の
勝ち有り」と。野球の神様は、今日も
あっちへこっちへと走り回り、勝負の
行方を楽しんでいるのでしょうか。

宇智郡 狛犬めぐり

木ノ原町 八幡神社

ちよつぱり、

ふつくらしてい
る狛犬です。鼻
が大きく頬も膨
らんでいます。



耳がはつきり
せず、頭の毛が
耳の上からかぶ
さっているよう
です。前脚には
筋状の走毛が刻
まれています。



尾は団扇型です。普通、尾の下部で
渦を巻き、そこから七本に分かれてい
くのですが、渦は中央にあり、数本に
分かれているというよりは交じり合
って上に伸びているようにも見えま
す。

岬形は頭頂部が山のように盛り上
がり、これが角であるようです。

土偶から見る 縄文人の信仰

(上)

土偶とは人形をした土製の焼き物

で、女性を誇張した像が多くなっています。縄文時代の早期には、かろうじて人形と判断できる板状の扁平なものが出現し、中期頃に立像となり、後

期には各種の土偶が登場しました。現在までに出土している二万点の

土偶のうち、ほぼ破損がなく完全体のまま出土した土偶は全体の5%にも満たないと言われています。しかも不

可解なのは、経年劣化や土の圧力によって「壊れてしまった」のではなく、「意図的に」壊されてから埋められたとみられることです。

古事記には、穀物を司る女神「大宜都比売」を殺すことによって、その遺体から稲や粟、麦などの穀物が生まれるという場面があります。これは日本だけでなく、女神殺しが食物を生む話

は世界中で見ることができます。つまり土偶は、再生を象徴する女神であり、それを壊すことによって、人の命や食物などあらゆるものの再生

を願ったのでしょう。それで、壊される場所として腹部が多い理由も分かります。腹部は赤子が宿る場所であり、分散することで増えていくと考えられるからです。

土偶が出土する場所としては墓、盛土などが一般的です。盛土とは、文字通り土を何世代にも渡って積み上げていく縄文人のモニュメントの一つで、彼らの祖先信仰に関わると考えられています。これらはどれも、再生する力を必要とする場所なのです。

縄文人は、土器を子宮のメタファーだと考えていたようです。縄文時代は、子供が亡くなると土器の中に埋葬していましたが、ここには「もう一度生まれてくるように」という願いが込められていたのかもしれませんが。

土偶は女神であり、人間ではありません。ですから、顔の表情を極力避け、奇妙な造形にすることで、「人間らしく」見えてしまうことを避けたと考えられています。

縄文のビーナス

長野県茅野市の棚畑遺跡から出土し、高さは27cm、重さは2.14kgあります。

頭部には円形の渦巻きが見られることから、帽子を被っている姿とも髪型であるとも言われています。文様はこの頭部以外には見られません。顔はハート形の面を被ったような形をしています。

八ヶ岳山麓の縄文時代中期の土偶に特有の顔をもっています。

腕は左右に広げられて手などは省略されています。お腹とお尻は大きく張り出しており、妊娠した女性の様子をよく表しています。



八百万の神々

玉祖命

たまのおやのみこと



天照大神の岩戸隠れの際に、五百津の八尺瓊勾玉を作ったのが玉祖命です。

五百津は数の多さを表わす言葉で、たくさん勾玉を作ったことになり、そして香久山から根ごと真賢木を彫り出し、この枝に八尺瓊勾玉を取り付けました。

玉祖命は、玉造部の祖神とされています。古事記にのみ登場し日本書紀はこの名前前の神は登場しませんが、同神と見られる神が登場しています。日本書紀の岩戸隠れの段では、八尺瓊勾玉を作ったのは「玉造部の遠祖・豊玉神」、「玉作の遠祖、伊弉諾尊の児・天明玉命」と記されています。どちらも玉造部の祖として、玉祖命と同神と考えられます。

五條十八景を訪ねて

第九景 「大善寺桜」

くつきよく 輪困 誰ぞ工を做す
 ばんし 満枝の香雲 琳宮を照らす
 やらい 夜来の雨を送りて 白龍去り
 へんべん 片々たる玉鱗 暁風に翻る

曲がりくねったこんな木の姿に誰
 が作りあげたのであろう。今を盛りと
 咲き誇る桜の花がそこに建てられた
 お寺を照らしている。夜通し降った雨
 を送って白龍（桜の花）が姿を消して
 ひらひらと美しい鱗のような桜の花
 びらが夜明けの風にひるがえりつつ



散っていく。

五條十八景

の詩画帳には、

桜の木らしき

ものが描かれ

ていますが、

現在は桜の木はありません。

大善寺は、他戸親王を弔うために建

立されたという伝承のある寺です。

他戸親王は皇太子でしたが、山部親

王（桓武天皇）派の陰謀により失脚さ

せられ、宇智郡（五條市）に流された

のち、母の井上内親王とともに暗殺さ

れたと伝わります。

大善寺と他戸親王の関わりは全く

分かりませんが、二つのことが考えら

れます。他戸親王は土合寺に幽閉され

たと伝わり、大善寺はもと土合寺であ

ったのかもしれませんが、また他戸親王

は、この付近の大岡の里の民家にかく

まわれたとも伝わります。里人がここ

に祀ったとも考えられます。



七夕祭のご案内

日 時 令和三年八月七日（土）

雨天決行

午後六時半〜 一願一燈

願い事を書いたろうそく

を一人にひとつ献燈してい

ただきます。

午後七時〜 七夕祭

参列者の皆様の健康長寿

を祈ります。雅楽の奉納を

予定しています。

初穂料 一家族千円

一家族につき一枚、木製

花御札を授与します。

Instagram @goryohongu

Twitter @goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を
付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

万葉の花たち

ひめゆり(ヒメユリ)

夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の
 知らえぬ戀は 苦しきものぞ

大伴坂上郎女（巻八・一五〇〇）

「夏の野の

茂みに咲いて

いる姫百合が

誰にも知られ

ないように、

相手に知られ

ていない私の

恋は、苦しく切ないものです。」



坂上郎女は大伴旅人の異母妹で、大
 伴家持の叔母にあたります。万葉集に
 は、長歌・短歌合わせて八十四首が収
 録され、額田王以後最大の女性歌人で
 す。彼女は穂積皇子、藤原麻呂、大伴
 宿奈麻呂らに嫁ぎますが、次々と死別
 するという悲しい運命をたどってい
 ます。

日本書紀にみる

十一代垂仁天皇(十)

八十八年秋七月十日、群卿(まぢみ)たちに

「新羅の王子、天日槍(あめのひぼこ)が初めてやって来た時に、持ってきた宝物はいま但馬にある。国人に尊ばれて神宝となつてゐる。私は今、その宝を見たいと思つ」と言いました。

その日に使者を遣わして、天日槍の曾孫である清彦(きよひこ)に命じました。清彦は命を受けて、自ら神宝を捧げて献上しました。羽太(はねたま)の玉一つ、足高(あしたか)の玉一つ、

鶴鹿鹿(つるか)の赤石の玉一つ、日鏡(ひ)一つ、熊の神籬(ひもろぎ)一つでした。刀子(いす)賀(が)がひとつありました。名前を出石(いすし)といいました。清彦は急に刀子は奉るまいと思つて、衣のなかに隠しました。天皇はそれには気づかず、清彦を労うため御所で酒を賜りました。

ところが、刀子は衣の中から現れてしまいました。天皇はそれを見て清彦に「お前の衣の中の刀子は何の刀子

か」と聞きました。

清彦は、隠すことはできないと思ひ「奉るところの神宝の一つです」と言いました。

天皇は、「その神宝は仲間と一緒になくても差し支えないのか」と言つたので、これを差し出しました。神宝は全部、神府(みくら)に納められました。

その後、神府を開いてみると、刀子がなくなつていました。「お前が奉つた刀子が急になくなつた。お前の所へ行つてゐるのではないか」と清彦に尋ねました。

清彦は答えました。「昨夕、刀子が私の家にやって来ましたが、今朝はもうありません」天皇は恐れ慚(おそ)まれてまた欲(ほ)しがろうとはしませんでした。この後、出石の刀子は、ひとりで淡路島に行きました。島の人は、それは神だと思つて、刀子のために祠を立て今でも祀つています。

昔、一人の人間が小舟に乗つて但馬国にやってきました。

「何処の国の人か」と尋ねると「新羅(しら)の王の子、名を天日槍(あめのひぼこ)という」と答えました。そして但馬に留まり、その国の前津耳(まへつみみ)の娘の麻挖能鳥(またの)を娶つて、但馬諸助(もろすく)を生みました。これは清彦の祖父です。

九十年春二月一日、天皇は田道間守(たぢまもり)に命じて、常世国(とこよのくに)に遣わし「非時(とまじ)の香果(かぐのみ)を求めました。現在の橘(たちばな)のことです。

九十九年秋七月一日、天皇は纏向宮(たむけむかひのみや)で崩御(ふし)しました。時に、年百四十歳でした。冬十二月十日、菅原(すがはら)の伏見陵(ふしみのみさ)に葬(むす)りました。

翌年春三月十二日、田道間守(たぢまもり)は常世国(とこよのくに)から帰つてきました。持つてきたのは、非時(とまじ)の香果(かぐのみ)を八竿(はちぼこ)八縷(はちぢり) (八個を串に刺し、八個を紐に通した)ものです。

田道間守(たぢまもり)は泣き嘆いて言いました。「命(いのち)を承(う)つて遠く遙かな国(とこよ)に行き、万里(まにり)の波(なみ)を越えて帰つてきました。この常世国(とこよのくに)は、神仙(せんとん)の秘密(ひみつ)の国(くに)で、俗人(よこ)の行ける所(ところ)ではありません。そのため

「何処の国の人か」と尋ねると「新行(あらた)つてくるのに十年も経(た)ちました。再び戻れるとは思(おも)ひもかけなかつたこと(こと)です。しかし、聖帝(せいてい)の神靈(かみたま)の加護(かご)により、やつと帰(かへ)ることができました。今(いま)、天皇(てんこう)は既に亡(な)く、復命(ふくめい)することもできません。私は生きていても何(なに)のため(ため)になりましようか」

天皇(てんこう)の陵(みさ)にお参(まゐ)りし、泣き叫(な)んで死(し)んでしまいました。群臣(ぐんしん)はこれ(これ)を聞いて皆(みな)、泣(な)きました。

田道間守(たぢまもり)は三宅連(みやけのむらじ)の先祖(せんぞ)です。

(垂仁天皇(すいに)おわり)



垂仁天皇陵